

東風見聞録

平成17年12月発行 通巻第9号
イーストウインドプロダクション
<http://www.east-wind.jp/>

巻頭コラム アドベンチャーレーシング・ワールドチャンピオンシップ 田中正人

11月14日～19日、ニュージーランドの南島で【アドベンチャーレーシング・ワールドチャンピオンシップ】が開催された。文字通りアドベンチャーレースの世界一を決定するレースである。そのレースに幸運にも我々チーム・イーストウインドも出場することができた。

さすが世界一を決定するレース。非常にレベルが高く、特にナビゲーションが難しく、後で聞くとトップチームにでさえ、かなりのストレスを感じていたと言う。

我々は序盤からナビゲーションに難航し、途中のマウンテントレッキングで悪天候に遭い、低体温症の兆候が現れた。チームで続けるかどうかを1時間半近く話し合い、結局中盤でリタイヤという不甲斐ない結果となってしまった。



チームイーストウインドから、佐藤浩巳、駒井研一、横山峰弘、田中正人

世界から強豪が46チーム集結したこのレースで、完全完走はわずか6チームであった。完走率の極めて少ない今大会はレースのレベルが高かったというのもあるが、それ以前に私たちイーストウインドは自分たち自身に負けていた部分があった。敵はコースであり、自然環境であり、自分自身である。が、その自分自身にある大きな問題に対して崩れてしまった事が敗因であると考えられる。それがうまくいくようになれば完走に近づけたと思う。この「対自分」への取り組みがトップチームと一番の違いだったと思う。



コース全体でほとんど道のないトレッキングセクション。

今回のレースの結果を踏まえ、私自身の反省すべき点が3点ある。1つ目は私自身のトレーニング不足である。特にマウンテンバイクでは私が足を引っ張ってしまった。2つ目は、今回のトレーニング不足を初めからチームメンバーに弱点として申告し、カバーしてもらう戦略を立てた事である。これは逆効果で、メンバーに「最初からやる気がないのではないか」と不安をもたらし、レース前からモチベーションを下げてしまっていた。そして3つ目は判断ミスである。レースの途中で下山をした場合、ルール上失格なるのだが、それをランク外扱いで次のステージから続行できると判断し、チームを下山に導いてしまった。これはこのレースに意気込みを持って参加したメンバーにとっては許せない判断だったと思うが、下山についてチームで1時間半も話し合いをした結論であり、後で不満が爆発したのはチーム間のコミュニケーション不足の至る所であろう。

今回のレースで私たちは技術的にも体力的にも不十分である事を突きつけられた。今後は各メンバーでその対応をしていかなければならない。特に私は体力を復活させなければならぬし、メンバー各自が苦しい種目の対策を立てていかなければならない。そして何より崩れかけたチームワーク作りをしていかなければならない。今回はリーダーの私の不甲斐ない結果からチームに不信感を抱かれしまった。まずはチームの信頼関係を取り戻す事が先決である。これには自分自身がトレーニングを通して体力的パフォーマンスを上げていき、メンバーには「やっぱり田中は強いんだ」と安心してもらう必要がある。



レース中は道端で仮眠を取る。体は疲れきっていても寒さで眠れない。

次のレースは、来年6月に北米で開催されるプライマルクエストだ。かつて日本からこのレースに出場したチームはいない。しかもまだ女性メンバーの佐藤浩巳は長丁場のレースでの完全完走の経験がない。従って、まずは彼女にはプライマルクエストで完走の実感を味わってもらいたい。そこから半年後にサザントラバースに出場して良い結果を出し、再来年には世界規模の大会でトップクラスを狙っていく。失敗する事もあるだろう。しかしイーストウインドは失敗を糧にすらししていく不屈の精神で突き進むチームでありたいと、私は常に強く思っている。



リタイヤとなったイーストウインドはゼッケンを外し、コースを進み続けた

先日、私は38回目の誕生日を迎えた。年齢的には体力も落ち、故障し易くなる。私はここ数年、レースや講習会を開催し、先で述べた通りトレーニング不足になり、その結果が今回のレースに反映された。しかしこの結果を厳粛に受け止め、ここから学んだ事を糧とし、新たな気持ちで精進していきたい。そうする事でまだまだ十分戦えるという自信を持っている。

私はこの4年間、伊豆アドベンチャーレースのコースディレクター、里山アドベンチャーの競技責任者、アドベンチャーレーシングクラブKOCCi主宰など、国内におけるアドベンチャーレースの普及活動に尽力してきた。が、今後はこの普及活動を維持させながらも、更に自分自身のトレーニングもしていくという新たなステップに挑戦をしていく。周囲からは「そんな時間はないのではないか」「両立するのは無理だ」と言われる。それは極めて常識的な意見だろう。



しかし私はこのアドベンチャーレースに自分のすべてを懸け、大きな事業を成し遂げたい。故に自分にとっては何方しなくてはならないのだ。そして今回のレースを終え、人並み以上の努力をして、人並み以上の結果を出す決意を新たにした。今後は時間管理と人を動かす事に集中して、普通の人ができないと思う事を達成していきたい。



難関コースを生み出したジェフ・ハント氏。「アドベンチャーレースは冒険的でなくてはならない」と説く。

今回、このレースの主催者でもあり、アドベンチャーレーシング・ワールドシリーズの責任者でもあるジェフ・ハント氏とレース後に実際に会って、ワールドシリーズ戦に対する彼の考えを聞いた。彼は「アドベンチャーレースの原点は初期のレイドゴロウズにある」と言う。競技色の強いマルチスポーツレースが増えてきた中で、彼はもっと自然と人間が対峙した冒険的なレースを創りたいというスピリッツを持っている。それは私の思うアドベンチャーレースの考えと一致し、ジェフハントの主催するワールドシリーズ戦の一戦として日本でも主催していく自信につながった。



目標があればどんな困難も乗り越えられる。アドベンチャーレースは人を成長させてくれるのだ。

2007年は私にとって、ひとつの人生の転機となる。選手としてレースでも最高の結果を出し、主催者として国際レースを誘致する。大事業である。やるからには並大抵ではない努力を強いられている。しかし「やる」という決意があれば目標達成は可能である。

二つの大きな事業を成し遂げるのは、常識の範囲では到底達成できない事と思われるだろう。しかしこういった常識の枠から外れた活動をしている人が世界にはたくさんいる。そういった人々から学びながら目標に向かっていきたい。

このような大きな目標を立てた今、不安というよりは新たな決意にワクワクした気持ちで一杯である。後は全力投球でやるだけである。これから多くの困難にも出会うだろう。しかし目標が定まった今、どんな困難も受け止められる自信がある。それらすべてを含め、未来が楽しみである。

【協賛企業】

Special Thanks

【露出媒体】

テイケイ株式会社様

株式会社ゴールドウイン様

ターザン(マガジンハウス様)

カシオ計算機株式会社様

尾西食品株式会社様

アドベンチャースポーツマガジン(山と溪谷社様)

ニュージーランド航空様

ダイナソア株式会社様

カヌーライフ(創工社様)

パワースポーツ様

カッパCLUB様

日刊スポーツ様

いつも【東風見聞録】をご覧頂き、有難うございます。そして今年も多くのの方々に応援を頂きました事を心より感謝申し上げます。

田中正人がアドベンチャーレースに魅了され、8年間勤務した会社を辞め、プロ化を決意し、チーム・イーストウインドを結成してから来年で10年となります。この10年間、日本の国旗を背負い、海外で数多くのアドベンチャーレースに出場すると共に、国内普及にも勤しんで参りました。その間には幾分か苦労もありましたが、多くの皆様のご理解、ご協力を頂き、ここまで来る事ができました。これ程多くの皆様にご支援を頂き、マネージャーとして、そして妻として、田中正人は本当に幸せ者だと思っております。

今、私たちは新たなスタート期を迎えます。また新たなアドベンチャーが始まります。どうぞ皆様、これからも温かい応援を下さいます様、よろしくお願い申し上げます。

来年もどうぞ素晴らしい年をお迎えください。

イーストウインドプロダクション 竹内靖恵

田中正人がアドベンチャーレースを始めて11年目。多くの方にご支援を頂き、心より感謝をしています。田中をご支援くださる方々と久しぶりに酒を酌み交わしながら多彩な方面の談義をマネージメント竹内靖恵がレポートします。

山岳ランナー 鏑木毅さん

「2005年は鏑木毅の年だ」と誰かが言った。北丹沢12h耐久レース優勝、富士登山競走優勝、キナバルクライマソン(ボルネオ)10位入賞、日本山岳耐久レース優勝(過去最高タイムの8時間14分を樹立)の前代未聞の成績を収めた鏑木さんは、田中正人が主宰するクラブKOCciのトレイルラン講師である。フィールドではライバルとなる田中とも、しばしば酒を酌み交わす仲である。



トレイルランには自然を楽しめる要素がたくさんある

田中 「以前はロードランナーだったんですね？ どうして山を走ろうと思ったんですか？」

鏑木 「ロードは起伏がなく単調ですけど、山は行く場所によって全然違います。岩場があったり、コースが変化に富んでいておもしろいんです。山には自然を楽しめる要素がいっぱいあるんです」

田中 「ロードレースは距離との戦いだったり、ライバルとの戦いだったりするけど、山はコースとの戦いになりますからね」

鏑木 「そうなんです。以前はロードランナーではあったけど、個人トレーニングで山には入っていましたね。父親が山を所有していて、手入れをしていたので、子供の頃は父親にくっついて山には入っていました」

田中 「第1回日本山岳耐久レース(通称ハセツネカップ)は400人程度だったのに、今ではトレイルランナーが増えてきて、今年(第13回)は出場者が2000人を越えましたね」

鏑木 「登山者が山岳ランに移動している傾向がありますね。また女性が増えている。女性が目を向ける競技は世に出るんです。このまま山を楽しく走る大会が増えていくといいですね」

勝つ事の意義を持つ

田中 「今年の富士登山競走も圧倒的な強さで優勝しましたね」

鏑木 「富士登山競走は年に1度の試練なんです。昨年、三連覇がかかった時は正直出場したくありませんでした。周囲の期待に応えるべく三連覇したい気持ちが早い時期から出てしまい、7月上旬に精神力・体力共に絶好調が来てしまって、本番の7月25日にはすでにピークを越してしまっていたんです(昨年の結果は3位)」

田中 「レース日に合わせてピークを持っていくんですね」

鏑木 「はい。ピークは1年間に3回程度しか作れません。今年はトレーニングでペースを抑え、富士登山競走の開催日にピーク時を合わせました。陸上競技では長期的にペースを上げて、短期的に調整に入ります。僕は大会3ヶ月前から調整に入ります。」

田中 「ロードでのノウハウを山に繋げていますね」

鏑木 「はい。僕の場合、ずっと練習日記をつけているんです。そうする事で調子の良い時のデータや悪い時のデータが残る。良い調子は必ず共通点があるんです。その共通点を活かして練習計画を立てるんです。手探りだけのトレーニングでは進歩はしません」

田中 「今年は富士登山競走、キナバルクライマソン、ハセツネカップとレースが続きましたが、短期間でどのように調整したんですか？」

鏑木 「昨年の12月から富士登山競走やハセツネカップのイメージをしました。常にこの2レースを意識して、2月くらいからモチベーションを上げました。性格的に年中追い込むことができないのでゆとりを持って早い段階から徐々に上げていくんです」

田中 「モチベーションのコントロールですね」

鏑木 「はい。まず勝ちたいという気持ちを燃やす。勝つことの意義を自分の中に強く持つんです。来年は6月にスカイマラソンが国内で開催されるというので、モチベーションをそこに調整していきます」

田中 「そうすると1レースを終えたら完全燃焼になるのでは？」

鏑木 「そうなんです。例えば富士登山競走を終えたら、しばらくは走ることを忘れます。仕事の時はまったく忘れず。これがレース間の気分転換になるんです。僕の場合、この気分転換がバランスよく影響しているようです。気分転換がうまくできる人は基本的に楽天才なんでしょうね。でも粘着性もしっかり持っていなければいけません」

田中 「今年はキナバルクライマソンに出場し、世界から集まった優秀な山岳ランナーと戦ってきましたね。出場してみてもうどうでしたか？」

鏑木 「海外の選手との違いは身体能力はもちろんですが、スタート直前の集中力がまったく違う。臨戦モードがひしひしと伝わるんです。登りで5位の選手が見えた時には、世界が見えた気がしましたが、下りが予想以上にすごかった。日本にはない様な足場の悪いところをガンガン飛ばすんです。決して雑ではなく、むしろ安定した走行なんです。躊躇がないんですよ。海外選手は、上りより下りの意識が強い気がします。」

トレイルランは「夢」である

田中 「鏑木さんの来年の目標は？」

鏑木 「スピードのあるレースに対応できるうちは心肺機能的に厳しいレースに出たいです。スカイマラソンなどのレースですね。ハセツネも今年はキナバルクライマソンの翌週ともあり、ベストな状態ではなかった。ハセツネの距離なら、まだキレのある走りでもゴールできる自信がある。来年はそれを実証して8時間を切りたい。でも実際、僕はもっと長距離の方が合っているんです」

田中 「鏑木さんにとってトレイルランって何ですか？」

鏑木 「夢です。ワクワクする事がトレイルランにあるんです。まだ確立されていない種目なので可能性がいっぱいあるんです。だから夢を持って取り組める。だから面白いし、辞められません」

田中 「鏑木さんのライバルは人？ タイム？ 自分自身？」

鏑木 「人に勝ちたいというのではないです。やはり対自分ですね。そして自分の記録。周囲の期待にも応えたいと思います。ハセツネカップに出場する前に『鏑木はハセツネカップはダメだろう』と言われていたので見返したい気持ちもありました。同じ年に富士登山とハセツネカップで優勝したのは良かった。でも来年は来年の風が吹く。今年の記録を引きずる気持ちはありません。来年は気持ちを新たにしがんばります」

鏑木毅(かぶらぎつよし)

1968年群馬県生まれ。群馬県庁都市計画課勤務。早稲田大学時代に競走部で箱根駅伝を目指すが出場ならず。就職後、28歳からトレイルランを始める。高崎市で妻と二人暮らし。

Adventure Racing Club KOCCI

KOCCI メンバーの紹介

「アドベンチャーレース」ってやってみたいんだけど、何からはじめたらいいの？という人のために結成されたのが『アドベンチャーレーシングクラブKOCCI』（主宰・田中正人）。

「KOCCI(こち)」は、イーストウインドの和語「東風」の古文読みで、その名の通り、春先に東方から吹く穏やかなそよ風を意味しますが、「一つ巖東風の怒濤に突き進む」など強くたくましい意味もあります。

KOCCIはその名の通り、アウトドアスポーツの新しい風となり、対自然・対人間・対自分へのチャレンジ精神を育むクラブで、各フィールドのプロフェッショナルによる基礎講習や実践を通してアドベンチャーレーサーを育成します。



関谷 多加志 (せきや かたし)

アドベンチャーレースは、面白いから止められない。4年前、大骨折で入院。歩行できなくなるまで痩せ細ってしまった足を回復すべく行った公園へ。歩行リハビリ中に偶然見かけたオリエンテーリングポスト。これがアドベンチャーレースを知るキッカケとなった。

これほど不確定要素が多いスポーツを他に知らない。それなりの準備と、その場での知恵と気持ちと体力と楽しむ心をフル活動させて、仲間と共に乗り越える！それが堪らない。仲間に救われる、仲間をカバーできるのが、とくに自分を感じる醍醐味。人生と同じ、なにが起こるかかわからないから、楽しいっ！



岩崎 勉 (いわさき つとむ)

アドベンチャーレースの世界に入るきっかけは、私自身ハマっていた『トレイルランニングの追及』にあった。

あちこちの山々を1人で駆け巡っていたが、もっと極めたい。様々な状況下での対応力を身に付けたいと思いKOCCIに入門し、現在に至るのである。

今夏、「セルフディスカバリーアドベンチャーin王滝」というマルチスポーツ競技に初出場。レース前半、大トラブルでリタイヤを覚悟しながらも仲間から心身サポートを得て完走を果たし、大きな感動をメンバーと分かち合った。

これからも、大自然相手に大いに遊ばせて頂きたい。トレイルランの追求と本格的アドベンチャーレースへの挑戦を目指して。



アトスポーツ・OD-BOX コロンビアスポーツウェア ザ・ノースフェイス

サロモン&テラーメイド モントレイル GoLite

アドベンチャーレーシングクラブKOCCIは以上の皆様から応援を受けています！（ スポンサー企業募集中）

イーストウインドプロダクション 2006年1月の関連イベント

日程	企画/レース	開催地	備考
1/21(土)	KOCCIナビゲーション講習会	東京都小金井公園	講師は田中正人と、元イーストウインドで現在国内オリエンテーリングのトップ選手の宮内佐季子

イーストウインドプロダクション

〒379-1611 群馬県利根郡みなかみ町鹿野沢637 M-3-2

TEL:0278-72-9292 <http://www.east-wind.jp>

田中正人 / 竹内靖恵